

2024年5月発行
伊達赤十字病院広報誌

伊達赤十字病院と住民の皆様を繋ぐ情報誌

だてクロス

総合病院伊達赤十字病院広報誌

- ・新院長就任のあいさつ
- ・眼科用検査機器及びレーザー治療機器の更新について
- ・令和6年能登半島地震の災害救護活動
- ・看護学校閉校について



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society
伊達赤十字病院

ご自由にお持ち
帰りください

Please take it home freely.

Vol.17



<特集>

『緑内障のレーザー治療について』



Doctor Profile

久居 弘幸 (ひさい ひろゆき)
院長 兼 第一消化器科部長

札幌医科大学大学院医学研究科臨床教授
日本内科学会総合内科専門医
日本消化器病学会専門医・指導医・学術評議員・支部評議員
日本消化器内視鏡学会専門医・指導医・学術評議員・支部評議員
日本肝臓病学会専門医・東部会評議員
日本消化管学会胃腸科専門医・指導医
日本消化器がん検診学会総合認定医・代議員
日本ヘリコバクター学会H.pylori感染症認定医
日本がん治療認定医機構がん治療認定医
日本プライマリケア連合学会認定指導医

地域の皆様に信頼される病院を目指して

令和6年4月1日付けをもちまして武智茂前院長のあとを引き継ぎ院長に就任しました久居弘幸です。この場を借りまして、皆様方にご挨拶を申し上げます。

私が伊達赤十字病院に赴任したのは、1997年10月のことで、約26年の歳月が流れました。当時と比べ、医療を取り巻く情勢がめまぐるしい変化を見せ、よりの確な経営判断を求められる中で、院長就任という重責を託されたことに、身の引き締まる思いがしております。

伊達赤十字病院は昭和15年（1940年）に開設され、以後、さまざまな変化を経て現在に至っており、急性期医療から慢性期医療、在宅復帰を支援する地域包括ケア病棟を兼ね備えた病院として日々精進いたしております。

そのなかで今後、伊達赤十字病院が取り組んでいくこととして「地域の皆様に信頼される病院」ということをあげたいと思います。この命題は以前から言われてきたことですが、それを達成する方法は病院のおかれている状況によって変わってくるものと思います。

現在の伊達赤十字病院は残念ながら、とりあえずそこに行けばなんでも解決できるという病院ではありません。医師の未補充、不足が原因でいくつかの診療科では十分な診療が行えないのが現状です。医師確保も重要な課題のひとつではありますが、そのなかで地域の皆様の期待にこたえていくには、適切な診断、治療を行うことはもとより、今まで以上に患者さんに寄り添った診療、看護を行っていくことが求められます。

地域医療を支える病院としての役割を果たすために

伊達赤十字病院では、多職種が各々の立場を尊重し合いながら連携するチーム医療を提供しておりますが、今後こうした活動をさらに支えていくためには、長期的な視野に立った人材の育成が必要です。また、患者さんに満足して頂くためには、職員にとっても働きやすく充実した職場でなくてはなりません。各々が相互の信頼関係のもと笑顔で生き生きと意見を出し合い、力を思う存分に伸ばせるような環境を作ることが私の役割であると考えています。

さらに、地域の急性期病院、地域医療を支える病院としての役割を果たすためには、西胆振医療圏の中核病院や開業医とのより親密な病院連携・病診連携を構築することは言うまでもなく、医療福祉関係機関、行政機関、住民の皆様との間での意見交換が必要と考えられます。

これからも地域の皆様から信頼される病院、社会に貢献できる病院を目指し、職員一丸となって頑張っております。どうか皆さまのご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

院長 兼 第一消化器科部長 久居 弘幸





Doctor Profile

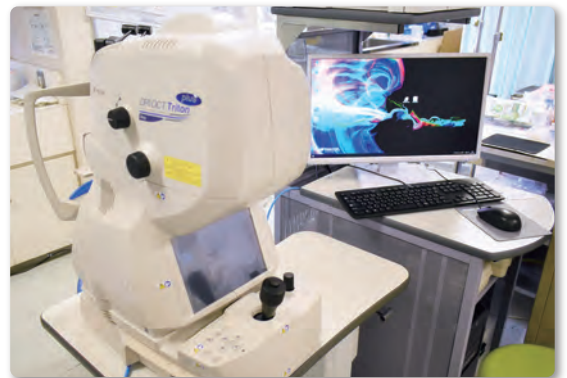
根岸 美紗希 (ねぎし みさき)
眼科医師

札幌医科大学附属病院 眼科診療医
市立室蘭総合病院 眼科医員
札幌医科大学附属病院 眼科診療医
伊達赤十字病院

網膜の病気を早く見つけるために

網膜は目に入ってきた光を視神経に伝える組織のことをいいます。網膜の病気（加齢黄斑変性症、網膜静脈閉塞症や糖尿病網膜症による黄斑浮腫など）を調べるために眼科では光干渉断層計(optical coherence tomography：OCT)を使用します。この度当院のOCTが新しくなりましたのでご紹介いたします。

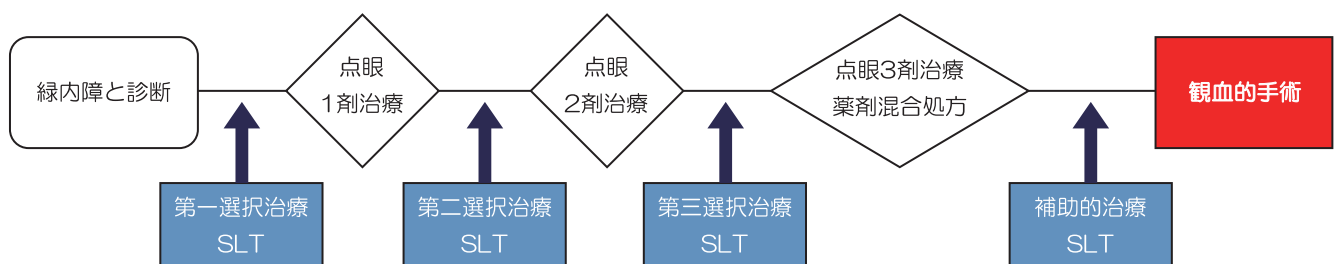
今回導入したDRI OCT Triron Plus Proは従来まで使用していた機器より撮影速度が上がっており、撮影時の患者様の負担を軽減することができます。また、この装置は光干渉断層血管造影(optical coherence tomography angiography：OCTA)の短時間で高画質な撮影をすることが可能になりました。OCTAは網膜や脈絡膜の血管の状態を確認できる撮影法です。主に加齢黄斑変性症で発生する新生血管や、糖尿病網膜症・網膜静脈閉塞症で発生する血流が通っていない部分を確認し、治療方針をある程度定めるために役立ちます。造影剤を使用しないため、アレルギー等の心配がなく検査が可能です。検査の方法自体は以前のもので変わりません。検査の精度が向上いたしましたので皆様のお役に立てると考えます。



光干渉断層計 (OCT)

緑内障と治療方法について

【緑内障治療手順】

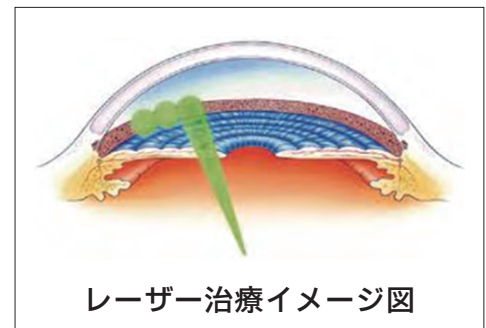


緑内障とは目に入ってきた光の情報を脳に伝える視神経に障害が起こり、見える範囲（視野）が狭くなってしまいう病気です。日本人の失明原因の第1位といわれております。自覚症状がなく、緩やかに視野障害が進行するため、見えづらさを感じた時にはかなり進行している場合が多いです。

治療は点眼、レーザー、手術と様々ですが、手軽に始められる点眼からまず始めることが多いです。どの治療でも完治はできず、一生管理が必要です。治療の基本目標は眼圧を下げ、視野障害の進行を極力抑えることになります。そのため、定期的に眼科通院を行って眼圧管理を行うことが重要です。

当院はこの度、TANGO N-TWという眼科用パルスレーザー装置を導入いたしました。これは従来の後発白内障に対するレーザー後囊切開術が行えるとともに選択的レーザー線維柱帯形成術（Selective Laser Trabeculoplasty：SLT）という緑内障の治療ができるようになりました。点眼治療の最大のメリットは手軽に始められることですが、毎日決まったタイミングや回数で行わなければならなかったり、視野障害が進行した場合本数が増えて負担になることがあります。また、点眼の副作用やアレルギーが原因で使用できないこともあります。

SLTはレーザーを線維柱帯と呼ばれる房水の流出経路にある組織に照射することで、房水の排出機能が改善され眼圧を下げるすることができます。1回の治療で点眼1-2剤分の眼圧下降効果が2年程度続くといわれております。SLTはどのタイミングにおいても選択可能といわれております。しかし、実際に行って効果を発揮するかどうかは緑内障のタイプによって異なります。全員に行えるわけではありません。また、適応であってもレーザー後効果が発揮されず、眼圧が下がらない場合もあります。今回の導入で緑内障の治療の選択肢が広がりましたので、皆様のお力になれば幸いです。



レーザー治療イメージ図

眼科医師 根岸 美紗希



緑内障のレーザー治療の様子

能登半島地震の



2023年度に初めて伊達赤十字病院救護班第一班の任務を拝命し、訓練を通じて日赤における災害救護のいろはについて学びました。正直初めて知ることばかりで戸惑いもありましたが、石巻赤十字病院で行われた大規模な訓練では実際の東日本大震災の被災現場を目にし、防災や災害救護に対する気構えが改まり身の引き締まる思いでした。

2024年1月1日に能登半島地震が発生し、おそらく自分が呼ばれるであろうという覚悟と実働で役に立てるのかどうかという不安を覚えながら派遣要請を待ちました。発災三週目に派遣されることとなり、実際に被災地に赴きましたが、役に立てたことよりも自分が学ばせていただいたことの方が多く思いました。災害救護の実践はもちろんですが、有事に備える一市民としての心構えが大きく変化しました。また、有珠山のふもとに住むものとして、自分が居住する地域で災害が起きた場合に医療従事者として何ができるかを考えさせられました。

訓練および実際の救護活動の機会を与えていただいたことに感謝します。実働経験者と胸を張って言えるようなことは何もしていませんが、次お役に立てる機会があればこの経験を生かして頑張っていきたいと思えます。

第一消化器科副部長 鈴木 咲貴



救護班で協力して段ボールベッドの作成



悪天候の中での避難所往診

私たちが派遣された地域は比較的医療ニーズが少なく、こころのケア中心に活動しました。発災からずっと活動している支援者がいて休めない状況に何とかならないものかと、すごくもどかしい気持ちになりながら自分たちに出来ることをして活動を終了しました。もっとたくさんの支援を必要としている地域・人・支援者がいます。早い復興を願って少しでも出来ることをしていきたいと思えます。

看護師 土谷 真菜

活動報告

今回、能登半島地震により被災された方々の救護として派遣されました。事前に日本赤十字社北海道支部や東北北海道ブロックでの訓練を複数回行っており、主事として被災地に行った際の流れや各々の役割を理解できていたのは活動するうえでとても良い経験だったと思います。もちろん、訓練とは違う場面もあり戸惑うこともありましたが、チーム一丸となることで乗り越えることが出来たと思います。

作業療法士（主事） 田中 勇氣



車で移動中も被災状況の確認



被災者の体調について現地職員から情報収集

3/4～3/8の5日間、日本赤十字社石川県支部において災害派遣コーディネート業務に従事してきました。日本赤十字社は災害救護とこころのケアの活動を行っており、全国各地から数多くの救護班とこころのケア班が集結し、活動をしていました。その連絡・調整等の業務も行いましたが、普段の看護業務では経験できない事を経験させていただき、自分にとって貴重な経験となりました。

また、石川県庁や輪島市役所での会議にも参加させていただき、多くの組織が活動する中での日本赤十字社の存在意義も改めて実感する事ができました。

今後も、被災地のために自分が出来る事をしていきたいと思っています。

看護係長 加藤 靖 広



コーディネートチームとしての
現地本部での調整業務



全国各地の赤十字病院が協力し合い救護班や
こころのケア班のサポート（指は能登半島を意味）

伊達赤十字看護専門学校閉校について

伊達赤十字看護専門学校



昭和19年伊達赤十字病院看護婦養成所開設より80年間に渡った看護師養成が終了いたしました。小さな街の小さな学校で、伊達市の皆様には、病院等での実習や地域の色々な活動へも参加させていただきました。そのような人との関わりの中から、たくさんの学びを得て学生たちは巣立っていきました。

1,755名の看護師を輩出できましたのもたくさんの皆様のご尽力とご協力のおかげだと思います。本当にありがとうございました。

閉校記念式典 2024年3月16日(土)

伊達赤十字看護専門学校 閉校記念式典が日本赤十字社副社長、北海道支部事務局長、伊達市長をはじめとする来賓の方々、赤十字教育施設関係者、道内赤十字病院関係者、実習施設関係者、伊達赤十字病院関係者、70回卒業生ら約80名が出席して行われました。



伊達赤十字病院理念

伊達赤十字病院は赤十字のこころを基に、地域の皆様に信頼される医療を目指します。

基本方針

- 1 患者様の人格、人権を尊重した、患者様の立場に立った医療を目指します。
- 2 医療人として常に自己研鑽し、より高度な医療サービスの提供をいたします。
- 3 病院における医療事故の防止及び医療の安全性の更なる向上を図ります。
- 4 胆振西部地域の中核病院として、医療、保健、福祉との連携を図り、住民の健康と生活を守ります。